【公報種別】特許法第１７条の２の規定による補正の掲載
【部門区分】第１部門第２区分
【発行日】平成22年4月8日(2010.4.8)

【公開番号】特開2008-206554(P2008-206554A)
【公開日】平成20年9月11日(2008.9.11)
【年通号数】公開・登録公報2008-036
【出願番号】特願2007-43589(P2007-43589)
【国際特許分類】
Ａ６１Ｇ　1/00　(2006.01)
【ＦＩ】
Ａ６１Ｇ　1/00　５０９

【手続補正書】
【提出日】平成22年2月22日(2010.2.22)
【手続補正１】
【補正対象書類名】特許請求の範囲
【補正対象項目名】全文
【補正方法】変更
【補正の内容】
【特許請求の範囲】
【請求項１】
ストレッチャーとベッド等の移載対象物との間を往復して患者の移載を行うストレッチャーに具備された移載ベルトにおいて、該移載ベルトの移載対象物側の一側縁部には補助ベルトを配設し、該補助ベルトは前記移載ベルト上に患者を載せた際にストレッチャー側から把持できる長さとして、移載時に該補助ベルトにより患者を保持できるよう構成した補助ベルトを備えたことを特徴とする移載ベルト。
【請求項２】
前記補助ベルトを患者の腰部を保持する位置に配設したことを特徴とする請求項１に記載の移載ベルト。
【請求項３】
前記補助ベルトに薄板状の把持部材を装着したことを特徴とする請求項１あるいは請求項２の何れか一項に記載の移載ベルト。
【手続補正２】
【補正対象書類名】明細書
【補正対象項目名】０００７
【補正方法】変更
【補正の内容】
【０００７】
請求項１の発明では、ストレッチャーとベッド等の移載対象物との間を往復して患者の移載を行うストレッチャーに具備された移載ベルトにおいて、該移載ベルトの移載対象物側の一側縁部には補助ベルトを配設し、該補助ベルトは前記移載ベルト上に患者を載せた際にストレッチャー側から把持できる長さとして、移載時に該補助ベルトにより患者を保持できるよう構成した補助ベルトを備えたことを特徴とする移載ベルト。
請求項２の発明では、前記補助ベルトを患者の腰部を保持する位置に配設したことを特徴とする。
請求項３の発明では、前記補助ベルトに薄板状の把持部材を装着したことを特徴とする。
【手続補正３】
【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】０００８
【補正方法】変更
【補正の内容】
【０００８】
請求項１の発明では、ストレッチャーとベッド等の移載対象物との間を往復して患者の移載を行うストレッチャーに具備された移載ベルトの移載対象物側の一側縁部に補助ベルトを配設している。この補助ベルトは、移載ベルトに患者を載せた際にストレッチャー側からでも把持できる長さであるとともに、補助ベルト上の患者を保持できるように構成されているので、ストレッチャー側から容易に患者の身体を保持して移載できる。また、補助ベルトは十分な長さがあるので前屈みになるような無理な姿勢をとらなくても良く、安全かつ容易に移載を行うことができる。
請求項２の発明では、患者の腰部を保持することができる位置に補助ベルトを配設したことによって、患者を適切に保持することができる。
請求項３の発明では、前記補助ベルトに薄板状の把持部材を装着したことによって、患者の身体と床面との間に、補助ベルトを容易に挿し込むことができるようになる。また、この把持部材を把持することでより力を入れ易くできる効果がある。
【手続補正４】
【補正対象書類名】明細書
【補正対象項目名】０００９
【補正方法】変更
【補正の内容】
【０００９】
以下、本発明の一実施例を図面に基づき詳細に説明する。
まず、図１に示すようにストレッチャー１は主としてキャスター型の車輪２，２，・・・を具備したベースフレーム３と、このベースフレーム３に下端部を止着する支柱部４と、この支柱部４に支持される載置台５からなる。
【手続補正５】
【補正対象書類名】明細書
【補正対象項目名】００１１
【補正方法】変更
【補正の内容】
【００１１】
次に、上記支柱部４は前記横フレーム８の左右方向の略中間部に止着された支持部材８ａに立設するように止着されている。この支柱部４は、上記載置台５の高さを調節するために昇降機構が具備されており、昇降ハンドル９の回転操作によって適宜作動するように構成されている。
詳述すると、前記支持部材８ａに取り付けられる取付部材１０ａを内側支柱１０の下端部に固着している。そして、この内側支柱１０に外側支柱１１を外嵌して支柱部４を構成している。この支柱部４の内部に昇降機構は配されている。この昇降機構の一例として図面では省略しているが、内側支柱１０の上端部に螺合体を止着する一方、外側支柱１１の上端部には回転自在にネジ部材を支承させるとともに、これら螺合体とネジ部材を螺合させている。そして、前記ネジ部材の上端部と前記昇降ハンドル９の基端部にそれぞれ止着したギヤを噛合させることによって構成している。
なお、上述した昇降機構とは異なり、モーター等の駆動力あるいは油圧シリンダ等を用いた昇降機構を用いても良い。すなわち、後述する載置台５を昇降できるものであれば良く、本実施例に限定するものではない。
【手続補正６】
【補正対象書類名】明細書
【補正対象項目名】００１２
【補正方法】変更

【補正の内容】
【００１２】
そして、前記載置台５は、図３及び図４に示すように前期支柱部４の上端部に支持される井桁状のサブフレーム１２上にボード１３を止着し、該ボード１３上にマット１４を止着して構成している。このマット１４は、適度なクッション性があり、移動中の振動等による不快感を軽減するよう構成することが好ましい。
【手続補正７】
【補正対象書類名】明細書
【補正対象項目名】００１４
【補正方法】変更
【補正の内容】
【００１４】
そして、この移載ベルト１５にはカバー２３を覆設する。このカバー２３は、例えば袋状に構成されており、開口部側から前記移載ベルト１５を挿通して、ファスナー等で抜け止め、あるいはずれ止めするよう構成したものである。また、このカバー２３には、移載ベルト１５に覆設したときに反支柱部４側となる一側縁部に補助ベルト２４を縫着している。なお、この補助ベルト２４は、移載ベルト１５上に患者Ｐが載ったときに患者Ｐの腰付近に位置するように縫着されるとともに、移載ベルト１５上に患者Ｐが載った際に反縫着側から容易に引き寄せられる程度の長さとしておく。
さらに、この補助ベルト２４には、へら状の把持部材２５が取付けられている。この把持部材２５には、複数の空孔部２５ａ，２５ａ，・・・が設けられており、把持部材２５を握り易くしている。
さらに、この把持部材２５には挿通孔２５ｂが設けられており、この挿通孔２５ｂに補助ベルト２４の中央部を挿通させ、ループ状の端部を巻き掛けるようにして、取付できるよう構成している。したがって、この把持部材２５は縫着された補助ベルト２４であっても後付できるので至便である。
なお、図面における把持部材２５は上述の通りである。しかし、この把持部材２５は、患者Ｐに補助ベルト２４を挿し込み易くするためのものであるとともに、補助ベルト２４によってしっかりと患者Ｐを保持するために引き寄せ易くするためのものであれば良く、ある程度剛性を有するとともに薄板状で把持し易いものとなっておれば良く、本実施例に限定するものではない。
さらに、本実施例では移載ベルト１５を覆設するカバー２３に補助ベルト２４を縫着しているが、直接移載ベルト１５に補助ベルト２４を縫着しても良い。